



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

聖家族 C年 (2021年12月26日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：サムエル記上 1章20—22、24—28節

第二朗読：ヨハネの手紙一 3章1—2、21—24節

福音朗読：ルカによる福音書 2章41—52節

## 家庭：いのちを交わす場

三つの朗読から

### 第一朗読

「願う」、「ゆだねる」という表現に注目しましょう。ハンナは神さまに願いました(21節参照)。そして、子どもを得ました。そして神さまからハンナに願いがなされました。授けられた子どもを仲介にして神さまとハンナの間に願いが行き交います。神さまのから願いを受けて、ハンナは神さまに子どもをゆだねるのです。

### 第二朗読

「信じ」、「互いに愛し合う」(23節)をここに留めたいです。「信じる」ことは日常の生活の中でできるかもしれません。しかし、「互いに愛し合う」ことは困難を伴います。「信じる」からこそ、「愛する」ことができるのでしょうか。二つのことは切り離せません。

### 福音朗読

最後の言葉「知恵が増し」(52節)を記憶に残したいです。イエスさまは、ナザレでのマリアさまとヨゼフさまとの生活の中で成長していきます。人間の成長とは知識を増やすことではなく、知恵を豊かにすることです。それは、身近な人との関わりの中でなされます。

### 【ちょっとひと言】

イエスさまは、いつからご自分が救い主、メシアであることを自覚し始めたのでしょうか。49節で見てきたように、イエスさまは「当然ご存知でしたよね」という肯定の意味を引き出そうとする疑問文

を語り、しかも、「～するのが当然である」という必然性を強調する表現を使い、しかも「家」とは言わずに「自分の父のもののうちに」と言われます。ですから、イエスさまにとって神殿が自分の居場所であるというのは確かではあるのでしょうけれど、むしろ天の父である神さまのことに専念するのが自分の果たすべき務めだという意識があったように思います。

今日の神殿での発見の出来事は、自分の父の家が神殿であるばかりか、自分の父の関心事に自分もこころと身体を寄せようとするイエスさまの使命の始まりを見るような思いがします。この点はマリアさまの言葉「お父さんもわたしも心配して」からもうかがえます。マリアさまは「お父さん」と呼びますが、イエスさまは「自分の父」と天の神さまを指して言っています。神さまへの従順を肉親への従順に優先させるという生き方が、もうすでに少年イエスさまの中に始まっているのです。

## 説教

神学生の頃、倫理の授業で「夫婦が悩みあい、祈りあい、話しあって決めた結論を神は拒絶するだろうか。たとえ、それが教会の教えに反するものであったとしても」と先生が言われたのを今でも覚えています。家族とはいのちを提供しあうところです。お互いのいのちを相手に惜しみなくあたえる場です。そこから、新しいいのちが生まれることもあるでしょう。そこから、いのちを神さまのもとへとお返しすることもあるでしょう。家庭にはいのちの交わりがあるのです。

結婚の準備をなさっている方々に勉強会の最後で、かつて倫理の授業で言われたことを用いながら次のように語っています。「家族とはいのちを交わすところなんだよ。そして、あなたたちはこれから先、いのちに関わることにつながって生きるんだよ。新しいいのち、思いがけない病気、事故、ケガがあなたたちに降り注ぐんだよ。それ以外にも毎日の生活はいのちを育む場面だよ。食事、睡眠、リラックサ。これらはどれも、いのちにとって大切なものだよ。家族になるとは一緒にいのちを養い、育み、導くことだよ。だから、いのちを大切に家族になりなさい。もし、いのちに関する様々なチャレンジを受けたときは、例えば出産、重い病気、子どものイジメなど、必ず家族で話しあいなさい。家族がよく悩みあって、よく話しあって、祈りあって決めたいのちについての決断は尊いものだよ。神さまは決して、それをダメとはいわないからね。それで、普段から夫婦のいのちの交わりを大切にしていきなさい」。

こんな話しをすると、みなさん真剣に耳を傾けてくれます。マリアさまとヨゼフさま、そしてイエスさまはお互いにいのちを交わしあいました。この家族の中には深い交わりがあったのです。聖家族とは完全無欠の家族のことではなく、耳を傾けあい、話しあい、祈りあいながら試行錯誤の中でも「共に生きる」家族のことです。